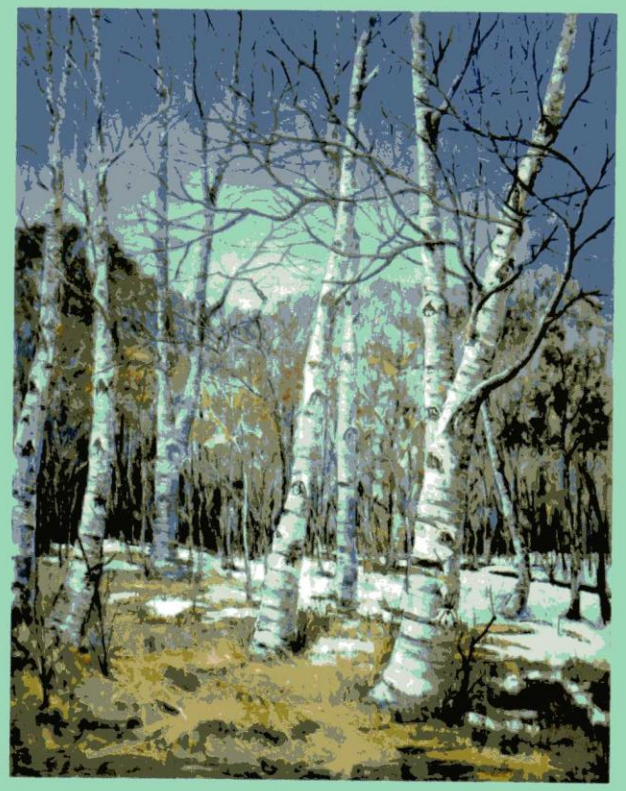
作東の文化

No. 37



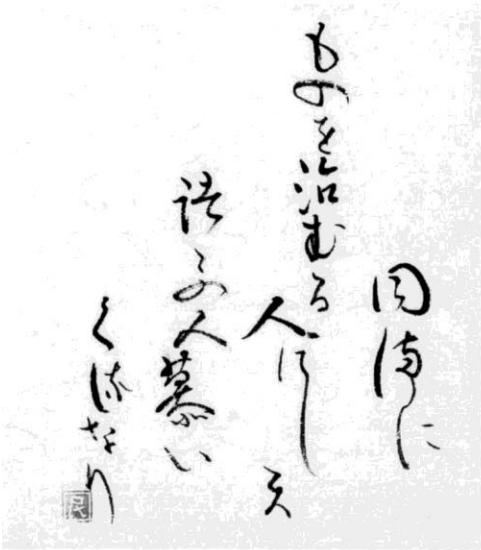
作東文化協会

題　字

真　野　みよ子

作東の文化

No.37



書道　島　民子

平成23年10月

目次

巻頭言

美作市文化連盟のこと……谷口重人……1

特別寄稿

風水害の記憶……岡田千茶……2

「絆」……里見明……3

所感寸言

霊界のことども……江見英雄……6

移り変わる自然……井上健一……6

老いのたわ言……吉政実夫……7

随筆随想

歴史を顧みて……江見英雄……10

ホタルを追って……長瀬加代子……12

「作州弁」が行く老人会旅行　衣笠隼巳……13

卒寿を迎えて……加藤美雪……14

空よ……岩本全子……15

絵手紙……井口祥子……16

信頼と云う宝……青山元江……17

歴史紀行

歴史観を訂正して欲しい事…江見英雄……20

美作・山陰・瀬戸内に残存鎮座の『大物主』祭祀社ご一覧　加藤芳英・春名倫子・安東菜穂子……21

茶堂様と今在家……宿野喜一……23

維新の志士　安東鉄馬……真野雅子……24

短文芸

俳句

花筏……山本登山……27

日傘……加藤美雪……27

露の玉……坂部金治……28

風鈴……樽井悦子……28

大地震……山本靖子……28

蝶……春名はるを……28

おりおりの……沖田はるみ……29

四季折々……青山美和子……29

若葉道……青山元江……29

雲の峰……豊田絢子……29

風鈴……樽井清江……30

新樹晴……井口祥子……30

柏餅……春名静山……30

荒畑の桐の木……森本久子……30

桜……髙橋やえ子……31

大震災……山下照夫……31

パリの秋……下山紀子……31

心天……杉本幸子……31

川柳

再出発……春名静山……32
核怖し……山下照夫……32
老い……山本昌子……33
誤解……山本登……33
被災地……太田智子……33
もとの鞘……衣笠隼巳……33
ふる里……遠藤榮……34
老い……原洋一……34

短歌

泰山木……阿部すみゑ……35
我は押しゆく……梅本信恵……35
田に畑に……井上さかゑ……36
いしずゑ……加藤幸子……36
ひかり……安東奈穂子……36
故里……春名静山……36
相寄る……山下光子……37
つなみどとう……江見英雄……37
歩めば……豊田絢子……37
笑顔……松本哲夫……37
祈り……山下三代子……38
東日本大震災……山下照夫……38
老いて尚……逸名……38
旅の思ひ出……末宗千歳……45
老いの幸せ……加藤保子……45
成る様になる……黒石貞子……45
露のきらめき……中川冨美枝……46
八十だらう……黒石登代……46
水……長澤和枝……46
八十路となりて……北村和子……46
飼ひ猫……福島美智子……47
花……船曳文子……47
生き甲斐……角南三津ゑ……47
穏しきひと日……角利津……47
猫が来て……日下智加枝……48
真夏……入矢敏江……48
峠……浜田くに子……48
おもひ……三浦智江子……48
瓦礫の下より……杉本幸子……49
生きの証し……関内惇……49

グループ活動

作東川柳同好会……51
作東絵画教室……52

作東文化協会グループ紹介……53
作東文化協会会則……57
平成22年度　作東文化協会事業報告……59
平成22年度　作東文化協会決算報告……61
平成23年度　作東文化協会会員・役員名簿……62
編集後記……73

命ありて……名部みどり……39
風……藤川亜也……39
若葉のころ……大内佐智……39
粟井っ子……池田保子……39
時時に……藤本伸子……40
田舎住まひ……森本久子……40
老いの坂道……安西苑……40
友を偲びて……光井房子……40
手にのりかねる……清田三智子……41
夫に分けたし……原幸子……41
父を偲びて……松井洋子……41
努力のあかし……横林冨砂子……41
心……鳥形節子……42
百足……内藤慶子……42
行く末……新田千晶……42
愛しみて看る……加百由起子……43
子は宝なり……宿野和穂……43
春近づくに……横山美恵子……43
甘酒……小林洋子……43
思ひ出……原田順子……44
孫……有元理嘉子……44
ふるさと……黒石初江……44
春が来て……新免三代……44

表紙説明

題「早春の白樺林」（洋画）

四月の晴れた日、友と二人で恩原まで白樺を描きに行きました。青い空に悠然と立っている白樺の樹は樹齢どのくらいだろうか、力強い命の息吹が感じられ、少し雪が残っている地面からは、春を待つ草木のささやきが聞こえてくるようなすばらしい風景に恵まれました。

妹尾　美智子

〔巻頭言〕　美作市文化連盟のこと

会長　谷口重人

美作市文化連盟会長の浅野健二さんが高齢を理由に勇退された。町村合併によって生まれた美作市、その中にあった六文化協会の連合体として美作市文化連盟が誕生し、その基礎づくりという大変な時期に初代会長としてご努力をいただいた。先ずは深い敬意と感謝の念を申し上げたいと思います。

その後任の会長として谷口が当たることになりました。その理由づけとして連盟に加入する全会員の四割近い会員数を擁する作東文化協会の会長に次期連盟会長をという共通認識が生まれていたこと、また、市の教育委員会が作東総合支所に移され、連盟の事務局を市の教育委員会・社会教育課が担当してくれている関係から会長と事務局は近いほど良いとのことでありました。浅野さんの人格識見には遠く及ばないことは充分承知していますが、二年間という限られた期間、自分なりに最善をつくして努めたいと思っています。

作東文化協会は、こうした経緯からも市内の協会の中では突出した会員数をもち、活動内容も群を抜いているといえます。しかし、そのことに甘んじていることのできない現況にあります。会員数は近年、年々減少しており、四十二あったグループも何件かが活動を休止する状態が生じています。こうした活動を維持し、継続して行くには必ず困難をともない、浮き沈みがあると思いますが、会員一人ひとりの努力と協力によってこの伝統ある会を守り育てていただきたいと心から望みます。

特別寄稿

風水害の記憶

岡田千茶
（朝日新聞岡山柳壇選者）

三月十一日、東日本大震災が起きた。地震、そして予想もしない大津波と、東電福島原発の被災で大被害だった。

私にも、戦前、作東の家での水害の体験がある。私の生まれ育った家は、兵庫県に抜ける県道沿いに有った。家の後ろは小さい畑を隔てて山家川が流れていて、西側は杉坂峠に通じる道で杉坂橋が架かっている。

小学五年生の時分は風呂を焚くのが私の役割で、学校から帰ると、水を汲みに小さい担桶で何回も山家川へ通い、風呂桶を満たした。もう一つの思い出は、夜振りと言っていた、手提げのガス灯を下げて川へ入り父と小魚を捕ったこと。

この川は度々氾濫して、川沿いの私の家は床下浸水はいつものことだったから、洪水が予想されると、父は畳をあげて一畳台の上に重ねた。多分、昭和九年の風水害の時だと思うが、夜になって水嵩が増し、私と弟は二階へ上がった。父と祖母がどうしていたか記憶にない。二階から階段を見下ろすと、裸電球に照らされた階下を濁流が渦を巻いて流れていた。その時怖いとも思わなかったが、今考えると家ごと流される危険に遭遇していたのである。水が退いた翌日から階下に住めないので二階暮しだったが、九歳の私には珍しくて楽しかった。

昭和十六年だと記憶しているが、その時の洪水で家が倒壊し、家財道具一切を失った。その時の詳細は忘れたが、午後の曇り空のなか、父と私たちは、県道を水が流れているなかを、道を隔てた少し高い所の畑に避難して、洪水の成り行きを見ていた。家が倒されて流される一瞬、父の悲鳴とも言えぬ絞り出すような呻き声を聞いたのは、一生忘れられない。

住む所のなくなった私達は、近くの家の離れに当分住まわせて貰った。生活道具一式を失ったのだから、当座、祖母と、私と母の居ない父はどのようにしたのだろう。当時十六歳の私にしても記憶がない。町から援助物資が届

けられたが、何せ戦時下のこと、満足のゆくものではなかったことは確かである。ありがたいと思ったのは親戚が届けてくれた着古した衣類だった。

少し落ち着いて、二カ月ぐらい経った頃、家の流されるのを見ていた畑に、家を新築することになり、材木を父の出所の梶原の、私にとって伯父の家から提供を受け、牛車で父と取りに行き、江見の製材所へ運んだ。

隣村の大工さんに頼んで工事が始まったが、当時の職人さんは昼も晩も賄い付きだったから、戦時下の食料もない時、晩には酒が一杯いる料理に、今にして思えば、祖母は苦しんだに違いない。表は床の間付きの八畳と六畳と縁側と玄関、裏は六畳と四畳半と台所の家ができあがったのは、二、三カ月後のことだった。

その家も、一昨年の山家川の洪水で、軒下近くまで洗われて使い物にならなくなった。

「絆」

里見　明
（書家　特別顧問）

最近「絆」ということばがよく使われ、見られるようになった。ということは裏返せば「絆」というものがそれぞれの分野でうすれかけているともいえる。「絆」とは漢和辞典と講談社の日本語大辞典にあるものとが著しく異なるのに驚いている。今回は後者に記載されている「肉親などの絶ちがたいつながりとか深い関係の意」をとるのが当然と思える。

昨秋十一月末、私の出身校の二回生の「ひやめし会」有志による文化展を開催したところ、思わぬ反響があり、手前みそかも知れないが大盛況裡に終了することができた。八十路になった記念に今まで生きた証に何かをやろうじゃないかという話になった。同じやるなら先輩、後輩、社会の多くの皆さん方に見ていただけるような文化的な行事をと企画、実現の運びとなった。

私達が昭和十五年、現葺合高校の前身神戸市立一中に入学した当時は第二次世界大戦の始まる前年ですべてが戦時一色。肌着は一枚、制服は「スフ」、裏地なし、ズボンのポケットは縫いつけられ手を入れることができない。冬は朝礼前に全員上半身裸でかけ足。そのあと摩耶颪の吹き荒ぶ中で寒風まさつ、タオルを忘れた者は「タワシ」で背中をこすられ、血がにじむ者もいた。軍事教練のきびしい連日、その他勤労奉仕、学徒動員で川崎造船所での不馴れな鉄工作業。そんな時代での青春。

連日の空襲・食糧難、そのあげくのはての終戦。戦後の言語に絶する生活、水害、大震災等々。戦時は海兵、陸士、予科練、特別幹部候補生等とかり出され私達の学友もあまた若い命を亡くした。

あの特殊な時代を生きぬきながら持ち続けたものが友情であり、その絆といえよう。

神戸市民会館での文化展には、日本画、押し花、俳句、仏画、書、絵手紙等を展示。

全国に散らばった同窓が故郷神戸に作品を持ちより苦難をのりこえ、生き残りをかけての文化展だったといえよう。

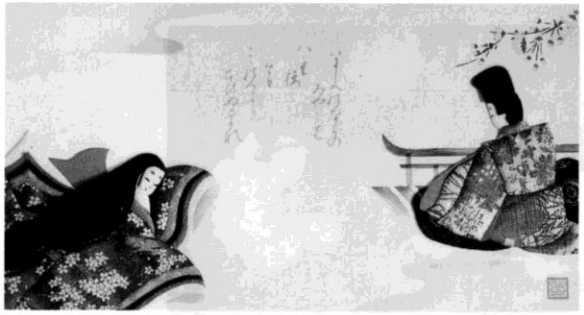
「絆」のありがたさ、尊さを今さらながら感じることができた。

複雑怪奇ともいえる現代の世相の中にも純粋な美を求め、芸術を愛し、人と人との絆をたいせつに持ち続けたいものである。

洋画　石　原　喜代子

所感寸言

感想や批評を文章で表現する
簡単そうで難しい
しかし文章化されることで
新たな感想や批評が生まれる



押絵　近　藤　喜代子

霊界のことども

江見英雄

私は生来神道に縁ある家庭に育ち、終戦後は山口県の神道団体に所属する日本神社磐門神社等に於いて太古神法伝授につき、可成きびしい伝授を受けた。有り難いことに其の要点だけはつかんでいるつもりだ。此の度、東日本で思いもせぬ地震津波が来、一万有余の人々が死亡せられ、いや応なしに霊界に入られた。洵にお気の毒と申上ぐる以外言葉はない。だが人間には因と縁と云うものがあってなかなかさけては通れぬものらしいが、日頃から産土の神をはじめ有縁の正しき神々に道をつないで置けば、万一の際、危険をさけることがある。もっとも人間界には数霊の作用を受けることが大である。一からはじまる数霊の作用等をも決してゆるがせにせず、之から活躍して貰わねばならぬ。赤ちゃんの命名等に当って余程真剣にかからねばならぬ。その人の運命を左右すると云うことを念頭におき、真剣で火花が飛ぶ程考えて家庭で命名して欲しいものである。

移り変わる自然

井上健一

平成二十三年も既に夏至を過ぎた。月日の経つのは本当に早いものである。

耕地整理された田園は、一面緑の絨毯で覆われている。何気なく谷間を見れば荒れ果てた棚田の姿が見えた。

昭和四十年代前半には、こんな荒れた棚田の姿を見ることはなかった。田植えが済んだ後の田んぼに、タニシが沢山見えた。カラスがタニシを拾いに来る。こんな風景がいたるところで見られた。

ところがタニシを拾いに来たカラスが、慌てて飛び去った。カラスが危険を感じたのは人間が散布した毒性の強い農薬である。

農薬の散布により労働時間は短縮

され、病害虫の予防も容易にはなったのだが、生態系は大きく変わってしまった。

昭和の後半から平成にかけて、その変化がよく判るようになった。

植物では、ホタルブクロや、キキョウ、月見草等は殆ど見なくなった。

動物ではタガメや、タニシ等数えればきりがない。

環境の変化で大型の野生動物が、増加した。鹿や猪が農作物を荒らし、熊が我が物顔で歩き回る。

これも人間の間違った保護政策の副産物である。

野生動物の保護が必要なら、荒れた農地を買い上げ、全国に数十箇所の保護地域を造ることも考えられるのではないだろうか。

野生動物の被害対策費が増加している今こそ、中途半端な政策ではなく、効果がある政策が強く望まれる。

老いのたわ言

吉政実夫

明日有りと思う心の仇桜
夜半に嵐が吹かぬものか

親鸞様が九才にして両親に先だたれ、出家得度を願い出た時の歌です。

此の度、東北大震災で明日を夢見て居た人達、大自然の流れに巻き込まれ、無常の風に連れ去られ、再び太陽の光を拝むこともできず、生き残った人達は家財道具一切を失い、永年住みなれた所を追われ、原発事故により放射能の後遺症をいだきながらの残世を送らねばならない人達のことを思えば他人事とは思えないこと、幾拾万の方々の悩み苦しみは如何ばかり。我れは九十四才今日、戦争災害にも負けず、神仏に守られて生かされて生きて居る日々でも煩悩業欲の消えることのない毎日です。

山も川も蒼しと賛えぬが其所に住む人はかわり、此所三年の内、身内の人が六人も亡くなり、お盆の提灯がゆれて居り、無常の風とは寺の住職がテレビが毎日放送されて居るが、もはや身辺におよぶとは考えて居らなかった。人間の寿命には期限と場所がわからん。逃げ道はない。其所まで来て居る。心配だ。冥土とは後生とは皆んな行って居る。なんとかなるだろうとは思えども、御説教を聞き、佛教書を読んでも一向に信心行者にはなれん。眠れぬ夜も有るが、明日は明日の風が吹くとするか。

取り越し苦労は此の辺で、毎度のことながら浅学非才も恥じず、投稿を御ゆるし下さい。

写真　江見精治

随筆随想

おりにふれて
感じたことや
見聞・体験を
なにくれとなく
書き綴る
思いのままに

手芸　野村啓子

歴史を顧みて

江見英雄

私の母は、津山森家の支藩、三日月の野井野藩播州上秋里の庄屋に生れた。其の祖母は日指の三沢家に生れた。曽祖父通称伝兵衛は父祖に継ぎ、退役迄二十二才から約四十年間庄屋として居役（キョヤク）地元日指、岩辺、大内谷、豊野、等四ヶ村の兼帯庄屋だ。主家は播州の一万石の殿様だ。何しろ相手が一万石の小名だし、四ヶ村の兼帯庄屋だから何かと酷しくて、朝に夕に働け働けと上意下達が酷しくて、私より四代前の庄屋三沢通称伝兵衛もその妻を二十九才で失っている。世の中の変わり様がはげしい時に大変な苦労だったことがよくわかる。朝早くから働け働けと云われて部落民の中には、ころしや伝兵衛とさえ悪口する者も居たようだが、小藩ならば仕方なかっただろうと思いやる。それでも就役約四十年殁後領主は大変尽力して呉れて、御苦労だったと賞しと石碑に書いてあった。気の毒なのはその人の相続人及び孫に当たる人も、今次戦役に陸軍伍長で戦死せられたことである。何にしても苦労の多い人だった。

数ある石碑の中に、先祖は毛利元就公の陰徳太平記にあるのだが、出雲大社に近く亀岳（かめだけ）と云う駅近く守備して十三万を領していたことが石塔に刻んである。其の後、変りありて津山森候に供（つか）えたが、領主が度々変るのでいや気がさし、武家奉公を止めて、日指に来り、医を以って業と為（な）す。程々の生活をしていたことは、其の家の墓地石塔を見れば大体わかる。戦死伍長の夫人はこれまた土居では名家と云われる妹尾家から、私の戦友の妹尾居郷（イサト）君の妹鳥羽（とわ）さんが嫁していたが、主人は戦死するし、子供は女子で他に嫁し、本人には私も両三回会ったが最近聞く処によると、その鳥羽さんも亡くなられたと云うことで、大約西大寺の方で成本さんと云われるようだ。

投稿に当たり、申添えます。

私は今生年九十七才です。土居駅前にて暮す独居老人です。

時々（月に二回か三回）、万の台憩いの森の老人施設で御厄介になっ

ています。
右脚が不自由で両方つえつきです。
運転免許は返納しました。
平成七年から殆ど毎月安東先生の古文書を勉強しています。
申遅れましたが、山口県日本神社等により太古神法の傳法を受け、級位は下から拾段位中道士上と云う処です。
土居城主三代目が晋山の城主に味方して徳川と戦い、戦死して部下が遺骨をもって帰り、日指毘沙門天堂の隣にまつっているが、祀り方が不十分なので改めて身分に相応しい院殿大居士の石碑等、まあ、先祖に当たるわけだから改葬して上げたい。
日指三沢伝兵衛の墓も右に同じ。
十年か二十年にならぬが、菅家に関係あるので国道二十五号線奈義町豊沢に菅家の三穂太郎の銅像を建てた時、作劭の多くの菅家の人共々僅か乍ら寄進させて貰いました。

江見英雄あらあら述べる

七月十七日は新町と裏町の愛宕の夏の祭典があり忙しい。

ホタルを追って

長瀬　加代子

四年ほど前、「ホタルを見に来ませんか」と大内谷に住む従妹から誘われて、大内谷集落の上の谷川へホタルを見に行った。
水際の草むらからふわっと舞い上ったホタルは淡い光を放ちながら谷川の上を飛びこっちへ近付いてくる。手をのばすとすっと草かげにかくれる。また、ホタルを追いかける。童心に戻ったみたいで、幼い頃なたねの殻を竹にしばりつけ、ホタルを追って川岸を走りまわったことを思い出した。自宅の下を流れる土居川（今は山家川という）には、その頃ホタルが乱舞していて、捕ってきたホタルを蚊帳の中に放して楽しんだものだ。
六十歳近くになって故郷に戻った時には土居川からホタルは消えていた。ホタルのことは諦めていたのに、大内谷でホタルを見てから急に魅せられたようにホタルのニュースを聞くとその地へ出かけた。旧英田町の河会地区まで車を走らせ、湯郷の大谷川にもホタルを見に行った。
ある俳人がホタルが川の水面から湧くように飛んでくると書いた文章を読んだことがあるが、湧くという情景が想像できなかった。実際に目にしてみると、俳人が表現したとおり、湧き上がるようにホタルが飛び、乱舞が始まる。幻想的な光のショーである。
しかし、温泉宿の客が団体で提灯を持ち歩道いっぱいにあふれて、彼等のざわめきの中でホタルを見るのは感動が薄れる。
大内谷のホタルの数は少ないが静かでよかった。静かなホタルの里を思い浮かべていた時、佐用町の知人から大谷地区の大谷川のホタルを見に行ったと聞いた。
早速、行ってみた。五匹、六匹、ホタルが飛んでいた。人通りは絶え、車も通らず、暗闇の静寂な谷川の上を小さな光がふわりふわりと舞っている。うっとりするほど美しく魅惑的で、闇の中に揺れる光を時間を忘れて見ていた。
奇しくも同じ名前の大谷川であるが、湯郷の大谷川のホタルは観客の前で饗宴をひらいているかに見え、

作東・大谷地区の大谷川のホタルは、隠れ里で恋人たちが逢瀬を楽しんでいるような風情である。

それにしても土居川では絶滅したと思っていたホタルが、土居川に架かる杉坂橋を渡ったすぐ先の谷川に生息しているとは、感動したという

「作州弁」が行く老人会旅行

衣笠　隼巳

あれ程日和が続いとったのに、朝起きて見りゃ、雨音が聞える。すぐテレビをつけると西日本はどこも雨の予報、しかもうちらじゃあ大雨注意報のおまけまでついとる。

今日の旅行は多少歩くとこがある云うけん、ふだん使わんおおけい傘に合羽も用意して集合場所へ行って見りゃあ、誰も重装備のいで立ちじゃあ。バスのガイドに、今日の客は耳は遠いけど小便は近いので再々トイレ休憩をするよう頼んで出発だ。平日じゃけん、あんまり渋滞はないけど、新名神高速も、雨で通行止になっとる。まあ、よりにもよって、やっちむない日に当ったもんじゃ言いながら、彦根へ着いたら雨は止んどる。傘を杖にしてやっとこさ彦根城へ着いた。そこでガイドの説明によりゃあ、取り壊しが決っとったのを、たまたま明治天皇が訪れんさって一言で工事が中止になったんじゃと！昔の姿で残っとるなんて素晴らしいことじゃ。ついでに天皇が津山へも来とりんさったら、津山城も生き残り、国宝だ、天下の名城だと全国にその名を馳せただろうに惜しいことをしたもんだ。それにしても重機の無い時代に大工や石工、左官達は日当ももらわず手弁当でようやったもんだ。

フーフー言いながら天守閣の上まで昇り一寸だけ殿様気分を味わったが、今度は降りるのが大変じゃあ。階段は急なし外へ出りゃあ石段は濡れとる。滑ってあぬけだまをとらん様より驚きだった。

もう遠くに行かなくてもホタルを見ることができる。うれしくて今年の七夕の短冊に書いた。

〝あの谷川が、どうか破壊されないように〟

に気をつけて降り次の目的地へ向った。

大河ドラマでお馴染みの〝江の資料館〟へ行った。だが、こっちは期待外れ。にわかごしらへの資料館、中はベニヤの板張りにパネルを並べ、土産物店は一つでも、ぎょうさん菓子や饅頭を売ろうと懸命じゃあ。ここでもあんまり雨にあわず帰路についたが岡山県へ近づくと大変な雨。

来年は日和にどこぞええとこへ行こうなあ言いながら無事に帰った。

卒寿を迎えて

加藤　美雪

平成二十三年七月五日、私は卒寿を迎え、振り返ってみれば喜怒哀楽を繰返していつの間にやら現在がやって来ました。気持はやらねばと思っても体の方がついてこないので悲しいことです。昭和元年に父が転勤で大阪府茨木高等女学校へ出向を命ぜられ、父母について行きましたのが五才でした。昭和九年に茨木高等女学校へ入学しました。その年の九月室戸台風（風速六十m）で木造の二階建の校舎が倒壊し、女教諭一名、給仕一名、生徒二年生四名が亡くなられました。何と申し上げてよいか悼ましいことで忘れることのできないことでした。お陰様で大阪府一の立派な三階建の白亜の殿堂ができました。私達は昭和十四年に卒業しました。昭和二十年に大東亜戦争も終戦を迎えました。昭和十八、九年の卒業の方は学徒動員で学業どころのことではなかったようでした。私はそんな中、縁がありまして結婚と云う運びになって、たしか昭和十八年十二月でしたか結婚式を挙げていただき、主人は歯科医師でした。

終戦日二十年八月十五日、父が足にはゲートルを巻き、国防色の服装で、「もう応召もこないから」と見舞いに来てくれましたが、運悪く八月十九日にこの世を去ってしまいました。父も教職を退職し、故郷江見町川北の実家へ帰りました。

私も二十年間住み馴れた茨木町を後に二十五才で故郷へ帰りました。其の後復員されて「二度と戦争はしてはならない」と云われ、その方々の

集りができて私も親戚関係の方と養子縁組を致し、父母と四人で田畠を一から始めました。山を開墾して新世紀と云う梨の苗木を植え、組合をつくり、山栗の生えている処は早生栗や銀よせの接ぎ木をして出荷するようになり、また桃の苗木も少し植え、摘果や予防をしたり袋掛けが大変でしたが少しですが出荷ができるようになりました。水田の方も一町程耕作することに決心しました。まだ機械化していないので牛飼いも始め、早朝山へ草刈に行くのが日課で鉄車輪の重い荷車で汗を流し乍ら坂も後より押してやっと登り上るようなことでした。山羊、羊毛、鶏等も飼い、すべて自給自足でした。子供三人もすくすくと成長して働くことは少しも苦にならずに居りました処、突然昭和四十年に主人が喘息の持病があり便所から戻り寝床に着くなり倒れて急死致しました。歩行用の田植機ができ、苗も作り一町程作ることに決心しました。広島・長崎のことを思い、阪神地震も大変でした。主人の戦友も亡くなられ、やっと落着いたと思えば、東日本大震災がおこり、毎日毎日テレビにかじりついて一日も早く復興して、仮設住宅で暮らせますよう遅れ馳せ乍ら御祈り申し上げて居ります。

空よ

岩本全子

春霞の空、夕立上りの虹、物思いにじっと見つめる秋の夕ぐれ、子供の頃「雪はどこから来るのかな」と真剣に見上げた冬の空、四季折々の大空が大好きです。これまで七十余年観て来ましたがいつも違う。同じものは一つもない。それが私は好きで好きでしょうがない。私の人生の良き時代を過した大阪へ、つまり東へ進む「ちぎれ雲」もまた。大空を斜めに切ってしまいそうな雲、高校時代の運動会で土を背に見上げた飛行機雲、いつも私の心をやわらげてくれます。心がゆきづまった時空を見上げると、自ずと道が開けてゆくようです。もう一人なんだといつも自分に云いきかせてはいますが、心細くなる時大空を見上げます。すると若い頃行った、上高地の山々がはっきりと開けてきます。定年になったら二人でゆっくり行きたいスポットでした。人間誰しも時には夢を追うのもいいのではと。だから時折り、山の坂道を背もたれにして、大空を見上げて、遠い空の国に行きます。そこには私の大好きな花々が咲きみだれ、小鳥の適当な囀りがあり、静かに音楽も流れ、幸わせな今の自分を、あたかも祝ってくれているような雰囲気があるのです。こう書くと、あたかも天国のようですが、こちらに居る時にだって実現することができると信じています。ある生きるための信念を持って、自分らしく突き進んでいきたいと常々思っています。もう短い人生、思い残すことのないよう日々を大切に生きたいと願っています。

梅雨も上り、満天の星空が開けています。今夜もすばらしい星空に感謝しつつ、限りないすばらしい夢を追いながら…

絵手紙

井口祥子

私の楽しみの一つは友からの絵手紙である。送り主の彼女は小学校、中学校、高等学校と共に学んだ同級生である。彼女の心が絵手紙を通じて伝わってくる。細かい心遣い、やさしさ、思いやりが伝わってくる。例えば「日陰でひっそりと咲くシャガ、目立たず控え目と思っていたけれど、なかなかお洒落で大好きな花になりました。」

「オダマキの花—太陽が大好きなのになぜうつむくのでしょう。ついついのぞき込んでしまうのです。」

「我家で華やいでいるのはゴデチヤ、元気な雑草です。」

一つひとつの花に寄せる彼女の思いが絵に表われ、文に表現されて私の心にじーんとひびいてくる。

私も小豆、大豆、黒豆や野菜を育てていると、小さい芽をのぞかせるだけでうれしくなってしまう。そしてまわりの草を取ってやろう、水をあげよう、中耕をしてあげようと毎日育つ様子を見ながら、どうしてやったらいいのか心をくだく。彼女に負

けないよう作物への気遣いをしてあげたいと思う。

また、彼女の絵手紙にはすばらしい絵のみならず、筆書きされた文章にも心打たれるものがある。例えば、彼女が書かれた文章の中に、

「いよいよ梅雨本番ですね。ようやく田植えをすませた家が多くなりました。時折、山道を歩いていますと、うぐいすと時鳥が交互に鳴いて坂道の上り下りの辛さを忘れてしまいます。」

短い文の中に彼女のくらしや心の動きをうかがうことができる。鳥の鳴き声に耳を傾ける心のゆとり、そして鳴き声に安らぎを覚えたり、励まされて歩む散歩。見習うことがいっぱいある彼女からの絵手紙が次はいつ届くのか楽しみである。

信頼と云う宝

青山元江

大正、昭和、平成と三世に渡り戦前戦後を通し、男女を問わず人それぞれに、苦労あり涙ありの波瀾万丈の人生だったと、しみじみ想いを馳せ乍ら過ごしていた矢先、忘れもしない、いや忘れてはならない二十数年か前のこと、ある人との出逢いがあり、其の頃の私はミシン仕事の内職をしていました。何年間のつき合いだったかはっきりしませんが、私よりは年上の方でお姉さんと呼んでお互い話好きな者同志、時にはお茶を飲んだりして四方山話に花を咲かせていました。でも其の人は人並み以上に苦労され、お母さんが四人の幼い子供を残して他界され、妹達の面倒を見乍ら学校へ通い、食い扶持を減らすため、とあるお屋敷へ女中奉公として行かれ、其の間の苦労や辛さは言うに及ばずとか、それでも辛抱され、やっと年季があけて帰り、良き人との巡り合わせで結婚されるも、御主人が病弱で其の上昔の人の言葉で「貧乏人の子沢山」のたとえで四男二女に恵まれ、今の世であれば生活保護、子供手当と良き制度もあり貴重な存在ですが、当時は食べさせることに精一杯で心血をそそがれたこと等々、一生の苦労話を聞き、時には涙することも度々でした。また、嬉しかったことは朝炊く米が無く、近くのお小母さん方へ米を借りに行った所「そりゃ可哀想なことじゃ。早う持って帰って炊いて食べさせんさい」と、一升ますに高盛りのお米を持たせて下さった時は本当に「地獄に佛」とは此のことと涙が止まらなかったとか、でも其の話は子育ても終り「子は親の背中を見て育つ」のとおりそれぞれ立派に成人され、当時のお姉さんは一生の内で一番幸せでした。

其の頃も何時も通りの話をしていた時、突然に「元江さん、私の貯金通帳をあずかって」と封筒を出され思いがけない言葉に、一瞬言葉が出ず咄嗟に出た言葉は「お姉さん何を言よりんさん。お姉さんの言んさることは何でも聞いてあげるけど、これだけはこらえて、立派な子供さんが居られるのに、これだけはごめん」と口から出ました。そうしたら辛そうな顔をして「そんなら絶対誰にも言わんといてな」と、「よう分かった絶対誰にも言わんからな」と返事をするのがやっとでした。其の時から私の胸の内にこんなにも信頼して下さった言葉を宝とし、絶対に人を裏切ることをしてはいけないと、何にも勝る宝として約束通り絶対口外していません。

其のお姉さんも、子供さん達に看取られて天国へと旅立たれました。「苦は楽の元」の通り幸せな老後でした。其のお姉さんから立派な宝を頂きましたお礼にと、此の齢となりせめてものお姉さんへの供養にと紙上を借りまして認(しとた)めました。感謝の日々を過ごしております。ありがとうございました。合掌

戦後六十六年　短歌

耐えがたき戦時の記憶たどりつつ
語る人あり老の影さみし

歴史紀行

大きなできごと
些細な歩み
みな
人間の歴史
かたりべとなって
伝えよう

生花　樽井清甫

歴史観を訂正して欲しい事

江見英雄

元禄二年（西暦一六八九年）津山藩森候家臣江見貞右衛門より鯰鳥越城主江見盛清円宗仝人弟秀政事源右衛門等に贈る書を見れば。江見氏は菅原道真公の三男庶幾（モロチカ）を菅家江見と云う。任越後守母は従三位安教の女なり。延喜十一年（西暦九一一年）勅命を受けて勢州に赴き和田教助を討つ。数度の戦功に従四位上越後守を受く。承平七年三月歿（西暦九三七年）御年四十二才云云。其の子孫江見治郎盛方作劦に住す。保元二年生（西暦一一五五年）なり家紋梅鉢海老二ツ引両等なり。平家の侍大将として天盃を賜う時伊勢蝦を下さる。治郎盛方戦陣に出づる時なれば之を鎧の袖にて受けて頂戴しける。其の姿勇ましく見えければえい感の至り紋所に賜う。平家に隨いて西海に於いて戦死す御年二十九寿永二年（西暦一一八三年）郷土史作陽誌等に依れば旧土居村竹田九〇三番地に墓はあることになってはいるが何しろ其の地は河川臨み水害を受け易い処なり。子孫は此のことを憂へ土居城西下り江見家墓地に改葬したるものならむ。流石に仝所の一番高き処に二米弱の円墳にして凡そ五十糎の丸石の墓石あり。霊晃院殿江見治郎盛方の刻込あり。一般に村人は侍塚と云うて尊敬し来れり。此の墓地に関はる人は日露戦役頃神戸川崎造船所へ移住就職の人多く仝地より大東亜戦に参戦せし海軍々人江見幽子氏（男なり）は終戦前五月南海に戦死し給う。娘の小谷さんは他家に嫁し居らるるも戦後私の世話で父と祖父の石塔を建てねんごろに供養せらるる。程近き万の山は安徳天皇の八咫（やた）の鏡発掘地もあり西海平家に関はる事情の多きを憶ゆ。

私は父と祖父に道を得て山口県日本（まと）神社磐門（いわと）神社外数社に於いて神道階位修業し、今では下から十位の階位に進めらる他にあの世へ移っていまだ成神成佛でき得て居ない人々を色々な法に依って速に成神成佛させて上げることを知っている。之によって占った時江見治郎盛方公が私が調べた処間違いなきことを占で知り安堵せり。

美作・山陰・瀬戸内に残存鎮座の『大物主』祭祀社ご一覧

加藤芳英・春名倫子・安東菜穂子

❶大和一ノ宮の三輪山・大神（おおみわ）神社の主祭神は「大物主神」（饒速日尊）。合祀神は「大国主」と「少彦名尊」の二神だ。

❷梅原猛著『京都鬼だより』で「弥生時代は裏日本と称せられる地域が日本の表玄関であり、その裏日本のスサノオノミコトを祖先とするオオクニヌシ政権が大和を支配していたと考えざるを得ない」と。『葬られた王朝』の三六頁で「阿波も吉備も、出雲王朝の権力がおよぶところであった」と。

❸『先代旧事本紀　訓注』『皇祖神饒速日大神の復権』『神々の原像』『日本建国神代史』

『日本国始め饒速日大神の東遷』等（いずれも批評社発行）著者・**大野七三**氏（今年八十九才）は、現地踏査を重ね、次のごとく『日本建国神代史』を要約（判断のご参考に）。

㋑須佐之男尊は出雲国を創建され、九州に西暦一七五年頃遠征し全九州を平定して「ヤマトノ国」（九州）の基礎を築かれた。㋺天照大神（卑弥呼女王）は須佐之男尊の九州での妃となり、須佐之男尊が出雲に帰られた後、子供のニニギ・ホデミ・ウガヤフキアエズ尊と共に日向国を治め、その後、高木神（タカミムスビ尊）と共に九州全土を連合国邪馬台国として、女王となる。㋩猿田彦は島根半島、大国主は出雲国西部一帯を治めている。

㋥饒速日尊は北九州統治の後、三二人の武将と二五部の物部軍団その他を従えて大和国に東遷され、長髄彦の妹ミカシヤヒメを妃としてウマシマジ命とイスケヨリヒメ（神武天皇の皇后）を生む。㋭神武天皇は東遷後、九州連合国家「ヤマトノ国」を併合し大和朝廷を創建する。ニギハヤヒ尊西暦二一五年頃亡くなられた後、神武天皇、橿原宮で即位されるときニギハヤヒの御魂を皇居内に皇祖神として奉斎された。

我々高齢者が戦前、戦後にたたき込まれた日本建国史は、奈良時代に作られた『古事記』『日本書紀』神代巻でニギハヤヒが可能な限り消されたことにより、「神武」・「崇神」・「神功」・「応神」時代もウソ創作によって解明が困難となる。

我々は、美作の足元から、それでも残存する大物主（ニギハヤヒ）のつながりを一覧にした。

A．美作国の大物主祭祀社合計は二一社

①英田郡＝二社　角南神社、上山神社の境内社に残存。

②勝田郡＝残存社がゼロ。①②は『美作神社資料（大正九年）で探した。

③苫田郡＝六社『苫田郡誌』（昭和二年）で探した。久田神社、羽出神社、栃畑神社（籾保）、大田神社、倉見神社、金刀比羅神社（加茂中原）。

④久米郡＝四社『久米郡誌』（大正一二年）で探した。榊葉神社（打穴）、八幡神社（倭文）、八幡神社（西川）、二上神社（大垪和）。

⑤真庭郡＝九社『真庭郡誌』（大正一一年）で探した。八幡神社（湯原禾津）、国司神社（湯原豊栄）、天津神社（落合高屋）、神谷神社（勝山神代）、朝日神社（久世黒尾）、富尾神社（久世富尾）、守吉神社（美和樫東）、犬宮神社（美和壹金尾）、下河内神社（河内）。

B．山陰（石見二社、出雲一社、伯耆一社、因幡二社）合計六社『山陰の神々』（平成二三年今井書店）で探した。

①石見国＝物部神社（大田）、城上神社（大森銀山）。

②出雲国＝玉造湯神社（玉造）註・櫛明玉神を大物主とカウントして。

③伯耆国＝三輪神社（淀江小波）註・崇神天皇時代に大和大神神社より霊勧請という。

④因幡国＝中臣崇健神社（古郡家）註・背後の三輪山盤座信仰、美取神社（岩美太田）註・式内神「大神社」に比定、宮司はオオタタネコの子孫と云う。

C．瀬戸内の備前　大神神社、美和神社と讃岐の（金刀比羅宮）の合計三社。

①大神神社（四御神土師之森）註・祭神は大物主、少彦那命、三穂津姫命。山上に旧社地あり。上記は『岡山市史古代編』（昭和三七年）**美和神社**（長船町東須）。

②金刀比羅宮（琴平）祭神大物主。金刀比羅神社は全国に六八三社存在。社伝によると「大物主は琴平に留まり中国・四国・九州を統治した」と伝う。

D．鬼ノ城の北（賀夜郡）、出雲勢力下の可能性。賀夜郡内に二つの岩山

神社が平安時代初期に創立。祭神は**吉備津彦**、配祀は**大物主**と彦足命。岩山神社（上有漢新明、創立九一四年）。岩山神社（上有漢金倉、創立九三一年）。

右は、「上房郡誌」（大正二年）の一〇八〇頁から探査した。

（正史を求む皆の力こそ、古代史究明の実現を導くと信じます。）

茶堂様と今在家

宿野喜一

今在家村の東端に地蔵菩薩を祀る地蔵堂（地元では茶堂様という）があり大和文化と出雲文化の交流道、東参り（伊勢神宮参り）西参り（出雲大社参り）の街道であり、江戸時代には幕府の参勤交代の要道として出雲往来と云われるようになりました。

地蔵堂が建立されてからは、道行く旅人達の憩いの場所でもあり、夏分はお茶の接待もあり、「茶堂様」として親しまれたとの事です。

茶堂様の前にある石碑は、享保年間に建立されその碑の正面に「毎歳六月九日から七月二十日迄接待」と刻んであり、石碑の東側面には建立願主、貫哲高敞と銘記されているが、不詳の文字あり、判然とせず不記。

西側面には、川北村、今在家村、江見村、藤生村、田原村等の当時の世話人九人の氏名が銘記してある。

堂屋（どうおく）を再建したのは八十二年後の文化年間であり、時の供養導師は仏法寺住職、上人儀鳳師であり、建築作業したのは備前邑久郡樫野村の大工、和吉の記録がある。

それから百四十六年後の昭和二十九年二月再建築したのですが、その当時、以前から今在家に在籍されていた作東船材工場の社長である、田中徳次郎氏が「何かとお世話になった謝礼の気持ちとして、茶堂様の建築資材全般に渉り寄付しましょう。」との申し出に部落一同大いにその好意に感謝して、当所の大工、妹尾正氏が奉仕的賃金で完成したのが、現在の地蔵菩薩を祀る茶堂様です。

毎年七月の盂蘭盆には、それぞれの墓参りを済ました後で、必ず地蔵菩薩を祀る茶堂様に参るのが習慣づけられていたが、今は年配の人の記憶に残るのみであると思いますが、いずれにしても堂屋（どうおく）管理の在り方に思慮すべきであると思います。

昭和二十九年二月に改築した時に、読経供養して戴いたのが、当時の仏法寺住職、山村智昌師であり、改築世話人は時の寺総代　末宗平十郎氏外四名でした。

（平成二十三年七月、昔の記憶を頼りに）

維新の志士　安東鉄馬

真野雅子

「市の文化財めぐり」に参加し、亡夫（玉樹　平成十五年没）の、祖母のその祖母の弟である安東鉄馬の石碑にお参りし（四ツ塚の墓前）、地元の人が「土居から、この様な人が出てくれたことを誇りに思う」との、話を聞き、夫が生前、役場から「安東家の墓地移転で、安東の直系で嫡子に当り印鑑を」と云われたと聞いていたので、諸兄姉の御力添えと、「作東町の歴史」（昭和四二年編集）により、彼の生涯を、繙（ひもと）いてみた。

①天保十四年、土居の庄屋安東桂次郎の二男として生れる。

②十二才の頃、原村の安東七郎右ヱ門に「剣術と、文武両道は一つの道で極めるには、他事に気が散ってはならない」と論され、努力し、腕白から有為の少年が育まれた。

③十五才頃、但馬の豊岡で池田章庵に、陽明学、播州林田の河野鉄兜に、経学詩文を学ぶ。

④播州より帰郷後、豊田鎌二に学ぶ。

⑤文久二年、豊田と鉄馬は京都に入る。

⑥元治元年二月、水口藩（滋賀県）の老臣の岡田直二郎を二人で、祇園帰りの彼を斬った。

⑦元治元年六月、池田屋騒動が起き、鉄馬はこの時、同志が保管する武器を別の旅宿で監視していた。そこへ新選組の隊長近藤勇、隊士六名が来たが、ゆっくりと対応し「豊田先生は旧師で、私は悪名の遊学生」と伝えた。近藤は、屯所へ連行せよと命じ、先に帰る。縄もかけず屯所へ進むうち、「用便をもようした」と、油断させ、二

人を斬って川原町の長州屋敷の門前で開門を願い、逃げ切った。

⑧元治元年七月十八日「蛤御門の変」が起きる。

⑨鉄馬等は翌日鷹司邸に向うが、守備軍に囲まれ窮地に落ちていた。彼等は、堺門から入り、大刀を振り、六人を斬る。屋上に登り、射撃戦術を目論むが、放火され、追い詰められ、顔に一発が命中し、弱冠二十二才尊王攘夷の礎石として、身を埋めた。辞世の歌は「わが大刀の折れめ限りを命にてなぎはてましを醜(しこ)のしこ草」と詠んだ。

三月に「出雲街道再発見ツアー」があり、彼も歩いたであろう、稗田から万能山へと歩いた。頂上に着いた時、ああ、彼もここから真野が原を見おろし、ほっとし、後振り返り幾多の思い出を巡らせ、出て行ったであろうと、天保に思いを馳せ、登った苦しみも、清々しい気分になり、我が胸に思わぬ宝物ができたのです。力添え下さった方々に感謝しています。尚、紙面の都合等で「作東町の歴史」の一部抜粋で、子思う母の歌等、二八〇頁から二八八頁にあります。

短文芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力

ちぎり絵　末宗順子

俳句

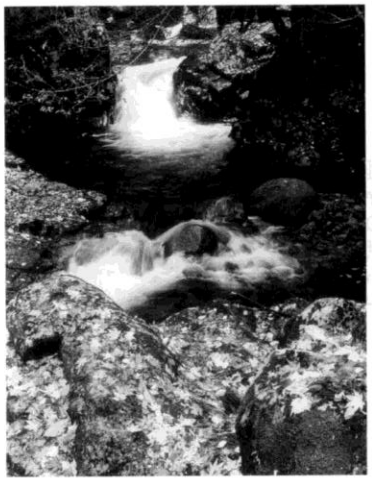


写真　末元正和

花筏

山本登山

残雪を踏む足巾の広きかな
娘等へ夢つなぎ華やぐ雛の段
炊煙の峡にゆらぎし枯木宿
鍬持つ手休めて蝶の行方追ふ
一句添え流して見たし花筏

日傘

加藤美雪

福祉バス若葉眺めて今日も無事
風鈴を吊し家今懐かしい
ドクダミの白き花咲き蔭干しに
トマト畠雨よけにと古日傘
パッと開き絵日傘まわす踊り子や

露の玉

坂部金治

闇の中浮かぶ和の字や夏の空
草刈機担いて喘ぐ帰り坂
虫の音を日記書く指聞いて居り
朝日受け芋葉にダイヤ露の玉
木の実追ひ皮のみ残す栗鼠の旅

風鈴

樽井悦子

風鈴の音さわやかに赤子眠る
軒下の風鈴ゆれて今日も暮れ
蜘蛛の糸顔にかかりて花に水
初蝶の動きおいつつ垣を越え
くるくると廻す日傘の親子づれ

大地震

山本靖子

初空に飛行雲あり飛ぶ鴉
大地震テレビに釘付け春炬燵
雑木に絡んで下がる藤の花
涙あり茄子の辛子の夫婦膳
神の留守守る構えの銀杏の木

蝶

春名はるを

ランドセル投げ出し蝶を追うてゐる
初蝶と宮の石段のぼりけり
ひそやかに津山城址は花の雨
茶摘み唄後楽園の風に乗り
シャツ脱ぎて夕立受ける漢あり

おりおりの

沖田はるみ

新しき手毬つつみのままにつく
耳もとへかそけき音の種なづな
いしけりの輪へ三羽四羽雀の子
いたどりの小さき水車へ谷の水
ささ舟の一つ追ひゆく赤とんぼ

四季折々

青山美和子

山寺の苔むす岩の残り雪
若葉風受けて大きく深呼吸
脱ぎ捨てて又脱ぎ捨てて立夏なり
風鈴を選ぶ親子に時流る
神無月出雲街道大渋滞

若葉道

青山元江

厨窓一声だけの初音聞く
押し車止めて息吸う若葉道
十幾年句碑にもみじの散り染めて
被災者の安否気遣い春寒し
積む雪に竹は自力ではね返えし

雲の峰

豊田絢子

山里に夕日沈みて青葉木菟
蜘蛛の囲の数多光るや雨上がり
孫の守ほっと一息木下闇
青空に背丈競ふか雲の峰
片蔭に入りては休む散歩かな

風鈴

樽井清江

朽ちし花一輪残し木の芽吹く
畑打ちや畦にたたずむ影二つ
白黄の蝶むらがりて風に舞う
思い出をよみがえらせる麦を活け
風鈴を遊ばす風や緑色

新樹晴

井口祥子

むくむくと生きる力やいぬふぐり
花見頃カメラ片手に登り行く
晴れの日を楽しむ如く蝶の昼
風鈴の音色楽しむ暇なし
新樹晴風と戯る濯ぎ物

柏餅

春名静山

水涸れしダムに現はる旧役場
拝殿の裸電球初詣
茸探る全神経を指先に
柏餅葉の若ければ葉ごと食ふ
戦争の末期塩飴柏餅

荒畑の桐の木

森本久子

神が消す雲のうろこもにげかくれ
夏草の朝露喜ぶ小虫すみ
荒畑に勢力増すや桐の花
猪の集ふすみかや荒田より
夕立の風にたわむれ赤とんぼ

桜

高橋　やえ子

故里へ残した桜見にゆかん
ひなげしに触れんばかりの牛の乳
麗かや谷水へさす日の光り
啓蟄や畑に肥やしの二袋ほど
沙羅の花ぽたりほたりの落花かな

大震災

山下　照夫

春寒むや天変地異の怖さ知り
浅き春地震怯える大八洲
地震来て津波原発春寒し
余震来る我故郷も花曇り
震災の悪夢癒やすか桜咲き

パリの秋

下山　紀子

秋天へエッフェル塔のエレベーター
新涼のパリの朝市歩きけり
モネ池に憩ふひとときの睡蓮花
サングラス思わずはずす大聖堂
ほろ酔ひの肌にセーヌの風涼し

心天（ところてん）

杉本　幸子（土居）

囀やめざめし朝の春めきて
花の鉢蜥蜴走りて足竦む
遊ぶ子等黄色き声や梅雨晴れ間
傘寿きて気を引き締めて新茶汲む
心天昼餉となりし酷暑かな

川柳

日本画　寺　師　喜代美

再出発

春名　静山

締め直す再出発の靴の紐
まだまだと言われ百姓青二才
騒がれてだんだん深くなる二人
子煩悩職場の鬼で押し通す
公園のベンチが愚痴を聞いている

核怖し

山下　照夫

廃棄物うやむやにして核焚くな
地震より尚恐しや原発は
原発の想定外は人災ぞ
子や孫に核のリスクを負わすまじ
我が生命続く限りは核止めん

老い

山本昌子

邪魔にだけならない老い先考える
賞味期限すぎた命がまだ続く
他愛なき言葉が欲しい雨の午後
見て居れずつい講釈が出てしまい
地下からも吐息が聞こえるこの残暑

誤解

山本登

誤解とけ妻の財布の口が開き
追羽根に負けて奴の髭書かれ
門出する肩に母の手伸びて来る
再会を誓う女の手が温い
転んでも酒はこぼさぬ花筵

被災地

太田智子

被災地を炬燵と語る長い夜
家守る背に因習の荷が重い
笑っても泣いても一人ちぎれ雲
おばあさんと呼び止められた耳が拗ね
流されて丸あるい石に夕陽さす

もとの鞘

衣笠隼巳

別れろと言えば納まるもとの鞘
起きてから理屈ならべる学識者
出発の際まで迷う色と柄
勝てなけりゃフロントまでが口を出す
おいと呼びなんなあと言う繰り返し

ふる里

遠藤榮

御神燈ゆらぐ夕べに太鼓の技
過疎だけど子等ははりきり夏祭り
小鮒釣り想い出浮ぶ絵となって
母の味知らず知らずに子に伝え
白エプロン母は笑って一張羅

老い

原洋一

幕のない老いの舞台で鍬洗う
歳時記の手垢は老いの夢の跡
残照に探すひとりの道しるべ
雨の日には雨の絵描いて老いの画布
接続詞並べて老いの弱さかな

ちぎり絵　山　本　津多江

短歌

洋画　秀谷光則

泰山木

阿部すみゑ

家の棟を越えて伸びをり泰山木は苔を纏ひて百年を見す

あらはにも太き根を張る泰山木の青き葉は照る鋼のごとも

葉をまとひ庭に直ぐ立つ泰山木に朝霧こめて如月に入る

我は押しゆく

梅本信惠

春風に背中を押されて登る坂どんぐりころりと我が足元に

玉葱の三百本を植ゑ終へぬ腰の痛みに耐へつつ我は

歩かねばやがて歩けぬ身とならむ手押車を我は押しゆく

田に畑に

井上さかゑ

谷遠く笛を吹くがに鹿鳴きて山畑のひと日は暮れ果てにけり

白き芽が重なりふくらむ籾種は一粒千倍の夢にかがよふ

連休を耕す孫に草刈る子農で生きし日もどり来しがに

いしずゑ

加藤幸子

数知れぬばつた慌てて飛び出す日芝を踏みしめ夫は草刈る

「携帯」を持つてゐろよと言ひおきて夫は独りの田仕事に出づ

祖(おや)からの田は堤防の礎となりて岸辺を水流れゆく

ひかり

安東奈穂子

奈義の山霞みて春の漂ひて野田の水田に朝日差しくる

古池に今年も住みゐる白鷺よ白光あびつつ岸辺を歩む

競ひあふ黄葉を映す水の面にゆらゆら夕日の輝くダム湖

故里

春名静山

我が家と向い合せに亡き父母の眠れる山にほととぎす啼く

松枯らす松食虫に故里の山に松の木姿消しゆく

年年に後継者なく店が消え一筋町の更地増えゆく

相寄る

山下光子

留め置きし新聞開きて読みおるに程無う上下の瞼が相寄る

バスを選り往は三回復四回乗り替えながらも叶う通院

懐かしの昭和の歌謡の放映を共に見とうて遺影を誘う

つなみどとう

江見英雄

君の住む仙台の町安かれとあしたゆうべに祈りて止まず

「文芸の道」拓(ひら)けたり役場前後の世までもはげみとならむ

日の丸をもつと上げよと旗日には常々思う老のつらさよ

歩めば

豊田絢子

昼さがり畑へと歩むこの吾をはたとみつめて狐は去りたり

畑中を光受けつつひらひらと蝶々の舞ふを佇みながむ

緑手を池一面に広げゐる布袋葵の花咲きにけり

笑顔

松本哲夫

コスモスの花咲き揃ふ迷路あり子らの笑顔が大きくはじけて

小雨の中タイガース田圃の田植なり太鼓に交じりて子供の声高く

田植終へ昔の農を偲びをり人牛共に苦しかりけり

祈り

山下三代子

こぶし咲く丘に登りて祈る我東北の人々元気を出してと

純白の山芍薬は露浴びて三輪咲けり初夏讃ふるごと

植ゑ終へし棚田に早苗の揺れをるに心休まる農婦の我は

東日本大震災

山下照夫

恐しや有史以来の大地震青天の霹靂(へきれき)とは正に此の事か

憂慮せし原発事故の発生す此の災難は子や孫までにも

ようやくに原発廃止の声あがれど悔いのみ残り遅きに失す

老いて尚

逸名

歳重ね転がる様に日が暮れる年金リズムで行くしかないか

うちけぶる樹樹の芽吹きのしづけさに独り打ちゆく玉葱の中打ち

衰ふる視力耳鳴り嘆かじと我が老いざまに気を張りて対ふ

生花　黒石佳甫

命ありて

名部　みどり

八十人の友らとステージのまん中に立てばするする緞帳上がる

山の畑に親子の鹿が今日も来ぬ餌やる我と追ひ拂ふ夫居て

眠る前の我にひとときの倖せあり朝刊の「親鸞」如何になさるかと

風

藤川　亜也

窓叩く風の音にて目をさまし五本の指を順に折りみる

やうやくに補植を終へて畔に立つ頬うつ風よ亡き夫に伝へよ

早朝の農作業終へトマトもぎ丸かじりするを鴉がにらむ

若葉のころ

大内　佐智

白きまま早ばや散りゆくつるばらよ三日なりとも散らずにあれかし

衣づれの音の如くに若葉より生れいづる風宝に思へり

我が庭の膨みけりな雑草も共に競ひて夏を迎へむ

粟井つ子

池田　保子

四名の新入生を迎へてはさあ始まるよ「粟井小入学式」

ランドセルに今日の学びをつめ込んだ「粟井つ子」らの声路に弾ける

「粟井小」の三年生はすつぽりと民話の世界に吸ひ込まれをり

時時に

藤本　伸子

初対面に誉められたれば笑みかはし送るを約す手拭帽子

得得とわが指に居る猫目石怪しく光るについみとれをり

夫婦して共に死する事出来得ぬと知りてはをれども離れ難しよ

田舎住まひ

森本　久子

この朝稲刈る農機の音止みてほつとしをりぬ子が成しくれて

針持てば亡き母すぐに浮び来る何でも縫ひて知らぬ顔してゐしを

そこに居し雀もかくれぬ植ゑ終へて農機の道も夏草となり

老いの坂道

安西　苑

立秋がすぎても暑き夕暮れを向う山に鳴くひぐらしの声

八十の齢を重ねて今日の日も登る坂道老いの坂道

館山は二月となれば街道に菜の花咲いて春を色取る

友を偲びて

光井　房子

生きてゐて今日は小春日「ツヤ子」さんと話し合つたら出るは溜息

七重八重の山吹の花に魅せられて古歌口ずさみゐし友は黄泉へと

足腰の痛さを話す友なれど卒寿も近く老いを生きをり

手にのりかねる

清田　三智子

曾孫は個性豊かに育ちきてわれは老いゆくいつの間にやら

黄砂降り夕焼け空は朧げに山も霞みて暮れてゆくなり

転作の豆植ゑあるは目につかずあれもこれもと手にのりかねる

夫に分けたし

原　幸子

両親の好みし鯨の粕汁が今朝も厨に温かさを増す

秋ひと日日名倉山にベル鳴らし紅葉狩なる老の集ひよ

ぜんまいの煮つけ美味しき旬の里今日の味はひ夫に分けたし

父を偲びて

松井　洋子

亡き父が記念に買ひし南部鉄の風鈴がいまだ縁に吊りあり

亡き父が粉雪降るなか三椏を切りてをりしを降る雪に思ふ

父が記しし一人暮らしの家計簿はその死の前日より白紙となりをり

努力のあかし

横林　冨砂子

道行けば稲田のまはりは電柵ぞ山からの獣を防がむとして

短歌会にて皆と仲良く勉強し成りし短歌は努力のあかし

湯に浸りひと日の汗を流しをり何事もなく過ぎし今日よと

心

鳥形　節子

被災地の心のかなしみ察しつつ明るい暮しを神に祈るも

春来たり豊かな心にはればれと光ささやく能登香の里よ

向う山に鶯の声春だよと我に告げ来る今日ののどかさ

百足

内藤　慶子

化粧して振り向き見れば初むかで上手く化けたねと角を振りをり

頭上げ背筋伸ばしてゆつくりと辺りを見てはむかでが進む

湯をかけてごめんねむかで火あぶりにも背すぢを伸ばして極楽へどうぞ

行く末

新田　千晶

つんつんと松の芽は伸びつんつんと天をめざすを児らよ見てみよ

ふるさとを築かせゆかむと思へども村に住む子は一人もあらず

聞いてみたし青葉若葉に行く末を子どもの一人もなきわが村の

書道　福井　正

愛しみて看る

加百　由起子

マルイ店に買ひ出しせしよ破れゐる母のリュックをまた仕舞ひおく

老い母がショートステイより帰る日は好物のカレー時かけて煮る

飯こぼすも下着ぬらすも旅立ちの助走と母を愛しみて看る

子は宝なり

宿野　和穂

三人の子は宝なり金銀に優ると詠みし憶良に諾ふ

猪熊を生け捕る柵に驚ける息子はもはや東京の人

女の孫の結婚式に負ふた子に負はれて行きぬ我は老いたり

春近づくに

横山　美恵子

風和み春近づくに木蓮の綿毛の蕾膨らむが見ゆ

テレビでは桜の開花を告げをれど東北の瓦礫の上にはしんしんと雪

隣り家の子供の声は賑はひぬ苗代作ると連休を来て

甘酒

小林　洋子

搗く程に甘味増し来る甘酒の残せしものか肘の鈍痛

とつぷりと暮れて車道はライトのみライトの幅の雨中を走る

水落ちに寄り来る浮草除く手に温める田の水指をほぐすも

思ひ出

原田　順子

廃校にも桜は三本残されて雲一つなき空に浮くがに

酒好きの義父の命日に酒供へ明けの日我は恭しく頂く

をりふしに「影を慕ひて」爪弾きゐし夫の遺影に我は琴弾く

孫

有元　理嘉子

男の孫は胸の扉を開けくれてゆつくり未来の夢を聞かすか

「いいぞいいぞ」父の声援背に受けて女孫は畠を管理機で鋤く

未熟児にて生れしあかりが歩き初む家族旅行の奥飛騨の宿に

ふるさと

黒石　初江

幹事つどひ同窓会を称へ合ふ友の笑顔の写真を片手に

独り居の父を訪ぬればくわくしやくと草を刈りをり田植控へて

ほととぎす聴けばなつかし亡き祖母が「おっつあんこけたか」と我に教へき

春が来て

新免　三代

山すべてをレース模様に覆ふ霜が桃色反すか朝日を受けて

二人寄りまた二人来てはじけたり孫の話に薬の話に

「ありがとう」とメール出来ないのもまあいいかだらだら書いて半日浸る

旅の思ひ出

末宗千歳

杳き日の富士山八合目のむろの中肩よせあひて一夜をあかしき

雲海にのぞける光まぶしくて神がうしくて両手を合はせき

富士山頂と御鉢巡りのしんどさはわが思ひ出の宝物なり

老いの幸せ

加藤保子

除夜の鐘ききつつすする年越そば十六人の子孫揃ひて

鶯の鳴く声かすかに聞こえくる連休明けの朝静かなり

帰りゆく娘は曾孫の手を引いて「無理せぬように」と小さく言へり

成る様になる

黒石貞子

つづまりは我一人なり薄暗き灯の下にしてひとりの夕餉

夫在らば如何に嘆かむ杉檜ひたすら育てて無に等しかり

残る世は如何程ならむ今更に何をあくせく成る様になる

手芸　藤原松子　生田本宣子　豊教子代

露のきらめき

中川冨美枝

朝の陽がひと畝ごとに照らしきてわが足元にきらめく露よ

くぐまりて草引きをれば野良猫が告げたき事のあるがにふりむく

大型のクレーンがゆつくりさがりゆく「夕やけ小やけ」の曲が流れて

八十だらう

黒石登代

子も全員孫も全員揃ひたり満足なしゐむ夫十七回忌

「姉さん」と一杯機嫌の弟の電話が絶えて一年が過ぐ

思ふ様に仕事が出来ぬと言ふわれに子は素つ気なく「八十だらう」と

水

長澤和枝

若きらに植ゑてもらひし早苗田を満たす水音ほつと聞きをり

同じ畦に同じに種まき水・施肥と丹精こむるに人参大小

地蔵なる弟の口に水やれば頬笑むがにも滲みゆくなり

八十路となりて

北村和子

琴弾くも編物するも草引くも総て肩凝る八十路となりて

「はいはいはい」返事をしつつも立ち上れず受話器を取るに切れてしまひぬ

価値観の似てゐる貴女がゐるからに八十路となりても楽しく生きる

飼ひ猫

福島　美智子

まどぎはに光を集むる飼ひ猫は夢の階(きざはし)登り行くなり

ぷりぷりの尻を振りつつ歩き行く飼ひ猫小春は朝の散歩に

地図に無い野道を通るか飼ひ猫は昨日とちがふ草の実付けをり

花

船曳　文子

花桃に魅せられ集ひし媼等は足腰病めども口はなめらか

「花泥棒は罪にならぬ」と聞きをれどやつぱり一言礼を言はねば

夫が植ゑし石楠花ついに枯れにけり阿修羅のごとき枝を残して

生き甲斐

角南　三津ゑ

山山は万緑と化し染まりゆく川面は夕日の万華鏡かや

バレンタイン「文芸の小道」に並み建てる歌碑に散りくる花びらの舞

観るほどになほ知るほどに詠むことを我が人生の生き甲斐となす

穏しきひと日

角　利津

からオケに靴を磨きて出ててゆく夫の歌はむ歌は知らざり

夫のため焼肉を焼きそそくさとその香まとひてコーラスに行く

今日もまた穏しきひと日暮れ果てて夫の寝息もとのひにけり

猫が来て

日下　智加枝

猫の額ほどの土地だといふからにわが猫を抱く額はどこぞ

猫は嫌ひそのひとことを聞く度に猫ではなくて私がへこむ

この家に帰つて住んで十一年ふたりと猫が炬燵にあたる

真夏

入矢　敏江

水の辺をはらはらたちて木木の間に入りゆく真夏の紋白蝶が

日曜日庭木を切りて木の陰に共に憩へばそれなりに夫婦

そつと触れやがて絡めてしたたかな蔓植物が真夏を伸びゆく

峠

浜田　くに子

「うぐいす橋」「坂の谷橋」と渡りつつ黒尾峠をわが下りゆく

後醍醐天皇を奪ひ返さむと駆けつけし高徳無念の杉坂峠

訪ね来し杉坂峠にいにしへを語れば遠く聞こゆる雷鳴

おもひ

三浦　智江子

倭建命(やまとたける)よいま一度あれ底知れぬａｔｏｍのくらき力の前に

被災地に勇気を与へる与へるとスポーツ選手この人も言ふ

センターよ捕るなと見詰む東北高校の三番小川の打球が伸びる

瓦礫の下より

杉本幸子（土居）

根こそぎに流れ着きたる桜の木瓦礫の下より花を
咲かせり

世に在れば米寿を迎えし主なりせめて供えし酒と
赤飯

耳遠き吾に扉の鈴鳴らし見馴し友の笑顔のぞけり

生きの証し

関内惇

涙が出で鼻水が出で咳が出で熱まで出づるも生き
の証しぞ

残照に雑木の梢（うれ）の伸びやかに紫立つなり我に見よ
とや

やはらかにあをみ増しくる村山に我は会へたり七
十七年目も

ちぎり絵　岡本玲子

グループ活動

グループ活動
それは
作東文化の
底力

作東川柳同好会

クレヨン画匂う賀状の兎抱く

今年の正月、川柳仲間のあるご婦人からいただいた年賀状にこんな句が書き添えられてありました。この句の内容を仮に散文で書くとしたら、「字が書けるようになった外孫から年賀状が届きました。今年の干支の兎がクレヨンで描いてありました。あまりに可愛らしいので思わず抱きしめたところ、かすかに匂うクレヨンの香りが孫の匂いのように思われ、体温までが伝わってくるような、幸せなお正月です」となるでしょうか。これは、なまじ言葉を費やした散文では求められない川柳独特の詩情性のなせるわざであります。

最近では、テレビ番組やサラリーマン川柳などでブームとして扱われていますが、「人をみつめ、社会をみつめる」川柳には、「季語」などの難しい約束もなく、自由な庶民文芸としての大きな魅力があります。

「作東川柳同好会」は平成十年、故山本章先生の発案で発足し、作東出身の岡田千茶先生に指導を受けてきました。現在は独立し、会員十数名で活動しています。毎月、題詠と自由詠（雑詠）を提出し、偶数月の第二水曜日には作東総合支所第一会議室にて例会を開催し、お茶を飲みながら会員相互の作品検討と親睦をはかっています。

最近の会員の作品を掲載しますので、川柳の味わいをご賞味ください。

鍋囲み今年の悔いを煮詰め合い
被災地を炬燵と語る長い夜
遠くにいる子よりもペット聞き上手
見て聞いて触れて確かめまだ迷い
山坂を越えた証の深い皺
母さんの働き過ぎを知る日記
隣家の友灯を確かめてから眠り
逝きし師の笑顔優しきベレー帽
今日一日生きた証の星仰ぐ
一度きり抱く母軽き壷の中
一つ覚え二つ忘れて老いと添う

さて、いかがでしたか？川柳に興味のある方は是非ご連絡ください。いつでも入会できます。初心者も大歓迎です。例会見学も随時可能です。一度気軽に遊びに来てみませんか？

連絡先：☎０８６８―７５―２８６２

原　洋一まで

作東絵画教室

作東絵画教室は、平成五年に絵の好きな仲間が集まって創られた教室で、お互いに気取らず、あせらず自分の持つ絵心を自由に表現し、楽しみながら学習していくことを目的にした教室です。

この教室の特徴は、個性に応じた指導方法であること。一人一人が自由な作風で描けることです。同じ題材を描いてもそれぞれの特徴があり、お互いに切磋琢磨しながら作品を仕上げていきます。

良き指導者に恵まれ、楽しい仲間と共に、みんなで冗談を言い合いながら、楽しい時間を過ごしています。

教室は、油彩画を月二回、水彩画を月一回開き、年間行事としては、五月に催す「春の絵画展」の他、スケッチ旅行や美術鑑賞にも出かけます。昨年は、大原美術館、瀬戸内美術館を観て、牛窓のオリーブ園でスケッチをしてきました。

作東絵画教室は、無理をせず、自分の持ち味を充分に生かすことができ、生涯学習としてとっても楽しく学べる教室です。

受講日

油彩画　第一土曜日及び第三土曜日
午後一時～午後五時まで

水彩画　第四土曜日
午後一時～午後四時まで

講　師
竹　中　信　清
（あの日のおもちゃ昭和館館長）

場　所
作東農村環境改善センター

作東文化協会　グループ紹介

部名		グループ名	種別	代表者名	指導者名	例会	場所	展示会等	作東文化協会会員 作東地区内	作東地区外	作東文化協会未加入者	合計
書道部	1	白雲書道会	書道	北村福作	里見明	月2~3回	里見明自宅・作東中央公民館・林野教室	白雲書道会展	26人	7人	2人	35人
	2	阿部書道会	書道	真野みよ子	阿部正登(雲魚)	月1回	岡山市北区伊島町阿部雲魚宅	県北書作家展参加	4			4
	3	書春名	書道	春名直子	春名直子	月3回	①高本公民館②土居西町コミュニティ③角南公会堂		5		2 13(子ども)	7
絵画部	4	作東絵画教室	水彩	妹尾美智子	竹中信清	月1回	作東農村環境改善センター	春の絵画展	9	6	2	17
	5	作東絵画教室	油彩	妹尾美智子	竹中信清	月2回	作東農村環境改善センター	春の絵画展	8	8	3	19
	6	さつき会	日本画	寺師喜代美	井上美智江	月2回	美作市江見		9	3		12
	7	水墨絵教室	水墨画	小林艶子	岩本敏子	月2回	JA勝英土居事業所内	バレンタインプラザ	5	1		6
	8	こぶしの会	油彩	田中佳栄子	権田直良	月2回	勝英農協作東支店会議室	グループ展	10	1	1	12
	9	彩の会	絵手紙	木南節子		月1回	作東公民館 瀬戸コミュニティハウス	郵便局(吉野・粟井・土居)、きんちゃい館	7			7
	10	すみれ会	絵手紙	谷口翠	岩本敏子	月1回	岩本敏子先生宅	プラザ展示、土居小学校展示	7			7
	11	吉野ハピネス	絵手紙	横山富姫	竹内まり子	月2~3回	吉野公民館	美作市東吉田の宝妙寺に於、2月・5月　年2回	5			5
園芸部	12	作東盆栽会	盆栽	青山巌	白鷺園園主(姫路市)	年4回	美作市湯郷 勝央町ファーマーズ	湯郷文化センター、勝央町ファーマーズ	5	1		6
茶華道部	13	ひまわりの会	華道	中田敏子	中田敏甫	月2回	作東公民館	月2回　公民館玄関に生花を展示する	13			13
	14	長家社中	茶道	谷本津多江	谷本津多江	月4回	作東公民館	お月見茶会	10			10
文芸部	15	英北短歌会	短歌	横山猛	関内惇	月1回	作東公民館	バレンタインプラザ展示　年2回 新聞発表　毎月1回	15	8	1	24
	16	能登香短歌会	短歌	井上さかゑ	関内惇	月1回			16			16
	17	吉野短歌会	短歌	新免三代	関内惇	月1回	美作市吉野公民館	吉野きんちゃい館・山陽新聞	11	1		12
	18	山家川俳句会	俳句	山本登	小島宇人	月1回	福山地区福祉センター		16			16
	19	作東川柳同好会	川柳	原洋一	原洋一	月1回	作東総合支所第一会議室etc	新聞発表(山陽新聞)	15			15
歴史部	20	歴史地名研究会	地名研究	新田祐之	固定した指導者は、なし。地域の高齢者又は郷土史家	月1回	作東公民館ほか 地域の集会所	展示活動は行わず	17	3		20
	21	古文書を読む会	古文書	真野みよ子	安東靖雄	月1回	美作市作東総合支所第一会議室		11	2		13

作東文化協会　グループ紹介

部名		グループ名	種別	代表者名	指導者名	例会	場所	展示会等	作東文化協会会員 作東地区内	作東文化協会会員 作東地区外	作東文化協会未加入者	合計
写真部	22	写真同好会写友	写真	小坂田　貢	小玉　司	年3～4回	野外 写真のこだま	兵庫佐用美術展応募・バレンタインプラザ展示	14人	1人	人	15人
芸能部	23	吉野ハピネス	大正琴	光辻　美代子	富永　仁美	月２回	吉野公民館大会議室		11	4		15
	24	琴伝流ＪＡ勝央あずさの会	大正琴	岩本　敏子	琴伝流大正琴中国本部 藤谷　守	月1～2回	ＪＡ勝英本店	作東文化協会芸能発表・美作市文化連盟発表会 各地発表会　福祉施設慰問	6	4		10
	25	作東友久琴楽会	大正琴	岩本　敏子	琴伝流大正琴 あずさの会メンバー	年2～3回	ＪＡ勝英作東支店	老人福祉施設慰問	20			20
	26	早渕流剣詩舞道	詩舞	石川　八千代	安原　鯉舟	月４回	作東公民館		7	1		8
	27	コール作東	コーラス	池田　保子	池田　直美	月２回 第1・第3金曜日	作東公民館		25	1		26
工芸部	28	がんびの会	ちぎり絵	名部　竹夫	名部　竹夫	年10回	粟井教育集会所、粟井中田渕公会堂 藤生・川崎・江見個人宅		20			20
	29	江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	大崎　安江	杉本　幸子	月１回	江見公民館		6	1		7
	30	福山ちぎり絵教室	文芸	香山　満寿子	杉本　幸子	月１回	福山地区センター	「山の学校」ホール	7			7
	31	むつみ会	押絵 ちぎり絵	山本　津多江	山本　津多江	月２回	白水・原	別にありませんが、頼まれれば応じられます。	10			10
	32	たんぽぽ工房	機織と 手仕事	江見　洋子	福原　朱美	月２回	旧吉野小跡地にある館 (吉野ふれあいセンターになる予定)	美作市豊国原、展示会 きんちゃい館朝市で展示会　３回	10		8	18
棋道部	33	双山囲碁クラブ (美作市囲碁連盟)	囲碁	横山　廣志	横山　廣志	月３回	作東公民館・作東老人福祉センター・環境改善センター	子ども囲碁　月３回・囲碁大会　年５回	29	48	9	86
情報映像部	34	お達者ねっと倶楽部	インターネット	鳥形　初美		月１回	粟井地区センター		5			5
手芸部	35	妹尾さと子編物手芸教室	手芸	妹尾　さと子	妹尾　さと子	月４回	作東公民館 船曳文子宅		15			15
	36	ビーズを楽しむ会	手芸	妹尾　さと子	西坂　暁子	月１回	作東公民館		10			10
									377人	101人	27人	491人

平成22年度　作東文化協会事業報告　1

【全　体　事　業】

年	月	日	事　業　名	内　容
22	3	28	22年度作東文化協会総会	バレンタインプラザ
	4	8	第１回理事会	事業計画、会員募集、研修旅行、文化誌編集委員会について
	4	23	文化誌編集委員会	編集委員長選任、編集方針について　以降３回開催
	5	21	第２回理事会	研修旅行、文化誌原稿募集、秋の文化展について
	5	21	会員募集開始	会員募集
	7	11	研修旅行	奈良平城京跡
	8	6	グループ代表者会議	秋の文化展作品出展について
	9	10	第３回理事会	秋の文化展作品、国民文化祭について
	10	9	文化誌36号発行	全会員に配布
	10	23	秋の文化展	作東Ｂ＆Ｇ海洋センターアリーナ　～24日
23	1	14	グループ代表者会議	春の文化展作品出展について
	1	21	第４回理事会	春の文化展、芸能発表会、総会について
	3	11	第５回理事会	総会について
	3	26	春の文化展	農村環境改善センター、作東美術館、バレンタインプラザ　～27日
	3	27	芸能発表会	バレンタインプラザ（芸能部）
	3	27	23年度作東文化協会総会	バレンタインプラザ

【専門部・支部活動】

年	月	日	部　名	内　容
22	6	4	江見・豊野支部	江見・豊野合同評議員会　会員募集、研修旅行、文化誌の原稿募集について
	10	15		江見・豊野合同評議員会　文化誌配布、支部研修旅行について
	11	11		江見・豊野合同親睦旅行（京都仁和寺などへ参拝）
	11	28	福山支部	福山支部研修旅行（工場見学等）
	6	14	粟井支部	粟井支部評議員会
	10	9		春日歌舞伎公演　～10日
	10	27		粟井支部評議員会
	11	19		粟井支部研修旅行
	6	9	吉野支部	吉野支部評議員会
	8	8		奉仕活動（公民館、吉野小学校跡地等清掃）
	10	20		奉仕活動（公民館、吉野小学校跡地等清掃）
	11	14		研修旅行（奈良）
	11	21		ニュースポーツ大会と餅つきなどふれあい会
	6	9	土居支部	土居支部評議員会
	9	5		研修旅行（観劇）
23	1	8	書道部	白雲書道会／白雲書道会展　作東美術館特別展室　～10日
22	10		絵画部	日本画／玄美会展（勝央美術文学館）、反省会（プラザホテル）
	11	23		平山郁夫遺作展（新見美術館）
23	1			院展
	2	22		さつき会作品展　作東美術館特別展室　～25日
22	3			春の書画展
	5	2		春の絵画展（交流展）　～５日
	9	1		岡山県展出展　～５日
	10	20		バレンタイン愛の美術展出展　～11月７日
	10	21		牛窓オリーブ園スケッチ旅行（大原美術館・瀬戸内美術館見学）
	11	12		しんわ美術展出展　～12月21日
	11	12		勝山いいこと見つけた展出展　～12月25日
	4			プラザ東側　絵手紙展示
	5			プラザ東側　水墨画、俳画展示

平成22年度　作東文化協会事業報告　2

年	月	日	部　名	内　容
22	4	24	園芸部	香川県の人と交流会　寄せ植元づくり
	6	12		香川県の人と交流会　コケ玉づくり
	6	18		高知県南国地区の人と交流会
	6	19		県北山野草展　奈義山麓　山の駅に出品　～20日
	10	23		坂出市、宇多津町の人と交流会　～24日
	12	8		市の花カタクリ植付会議
	12	8		カタクリ植付　～16日
23	2			カタクリ育成会議、活力剤の散布
	3			カタクリ観察記録　～５月
22	9	22	茶華道部	お月見茶会　作東公民館
21	2		写真部	活動計画打ち合わせ会（例会）
22	5			智頭・恩原高原撮影会
	5			プラザ展示
	8			佐用郡美術展出品
	11			兵庫県赤西渓谷撮影
23	2			冬景撮影
22	4	2	工芸部	おかやま蘭の祭典＆バラ・ガーデニングフェア　～６日
	4	17		2010ファーマーズ押花合同作品展＆体験会　～18日
	5	30		合同野外学習　姫路方面（好古園、加西フラワーパーク）
	10	16		2010ファーマーズ山の幸染め合同作品展＆体験会　～17日
	4	18	棋道部	双山囲碁大会　年３回（４月18日、８月22日、１月30日）
	6	27		美作市囲碁大会　年２回（６月27日、11月23日）
	3	27	芸能部	第６回作東文化協会　芸能発表会
通年事業			絵画部	日本画／井上先生宅　月２回
				水墨画・佛画・俳画／ＪＡ勝英作東支店土居営業所　月２回
			文芸部	例会　偶数月第２水曜日
				新聞発表
			園芸部	山野草／カタクリ植付（作東支所、土居小学校、江見小学校、粟井小学校）、カタクリ観察記録
			茶華道部	ひまわりの会　作東公民館　月２回
				長家社中　作東公民館　月２回
			歴史部	歴史地名研究会　定例会　月１回
				古文書を読む会Ⅰ・Ⅱ　作東総合支所会議室　月１回第３木曜日
			写真部	撮影・反省会
			棋道部	囲碁交流会　毎週月曜日
				美作市囲碁連盟／子ども囲碁教室、高齢者囲碁教室
			情報映像部	パソコン講座　粟井地区センター（４月15日、１月20日）、ホームページの更新

【連　盟　事　業】

年	月	日	事　業　名	内　容
22	4	4	第２回美作市日本舞踊連盟発表会	美作文化センター
	6	20	美作市文化連盟文化祭第３回芸能発表会	大原公民館
	6	27	美作市囲碁大会	美作市囲碁大会　年２回（６月27日、11月23日）
	10	30	国民文化祭	大原会場に参加　～31日
	11	6	国民文化祭	英田会場に参加　～７日
	11	21	第４回美作市吟剣詩舞道連盟発表会	作東バレンタインプラザ

編集後記

『作東の文化』第三十七号が会員多数の方々からのご投稿と特別寄稿をいただいて刊行できましたこと、まずもってお礼申し上げます。

本号より題字を真野みよ子氏に揮毫いただき、使用させてもらいました。

今年も特別寄稿として岡山市の岡田千茶氏より「風水害の記憶」と顧問の里見明氏より「絆」の玉稿をいただきました。心よりお礼申し上げます。

発刊以来欠かさず寄稿いただいておりました元会長の阿部正登氏の玉稿が、本年は先生のご高齢と体調不良から欠稿になりましたこと、誠に残念に思いますが、体調の回復をお祈りし、来年の寄稿を期待したいと思います。

また、本号よりグループ活動の活発化を図るために、グループ活動の紹介を継続して掲載することと致しました。グループの認識を深めていただき、一人でも多くの仲間が増えることの一助となればと考えます。

高齢化の波は、作東文化協会にも押し寄せ、九十歳を越えた方々をはじめ高齢にも関わらず、本号にご投稿くださいました多くの皆様に益々のご健勝をお祈り申し上げますとともに健康にご留意くださいまして、今後とも文化活動、そして「作東の文化」誌へご投稿いただきますようご期待申し上げます。

編集委員会

作　東　の　文　化

第 37 号

平成23年10月15日発行

編　　集　作東文化協会文化誌編集委員会
（美作市教育委員会　社会教育課）

編集委員　青山　時弘　安東　靖雄　梅澤　紀之
小林　秀雄　新田　祐之　原　洋一
春名　貞和

発 行 所　作　東　文　化　協　会
岡山県美作市教育委員会　社会教育課内
TEL（0868）72-2900　〒709-4292
HPアドレス　http://bunka.boo.jp/

印 刷 所　株式会社　廣 陽 本 社
岡山県津山市田町22